

バーチャルYouTuberの 終わり

九司空守

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

今日は、2020年12月17日0時。

これは、1つの終着点と出発点の出来事を綴る物語（ドラマ）。

目次

バーチャルYOUTUBERの終わり

1

バーチャルYouTuberの終わり

これは誰かに向けての語りであり、独白（モノローグ）である。

何故これ是在るのか、と問われれば私は救いであれ、と答える。

バーチャルYouTuber（バーチャルユーチューバー、英：virtual YouTuber）は日本発祥の、コンピュータグラフィックスのキャラクター（アバター）「1」、またキャラクター（アバター）を用いてYouTuberとして動画投稿・配信を行う人「2」。また、その文化。通称、VTuber、Vチューバー（ブイチューバー）「3」。

彼らは2016年12月のある日、1人のAIを名乗る少女が自身を呼称する事で始まった文化（コンテンツ）だ。

その始まりは今見るととても穏やかな印象を覚える。

激しい波が起こるのは1年後の2017年の11月から12月だ。

黎明期、その時代を目の当たりにした多くの視聴者がこの文化に捉われていった。

時代は過ぎ、現2020年12月17日、バーチャルYouTuberは今終わった。きっかけは1つのFLASHゲームだった。

『プリキ』と呼ばれる者にバーチャルYouTuberは最後を得た。

『プリキ』はこの文化と共に何故かあった。

『プリキ』がバーチャルYouTuberを選んだ訳ではない、バーチャルYouTuberに由縁がある訳でもない、ただ『困難』で『無謀』だから『流行った』だけである。

そして両者の死闘はこの文化の伝説を生む事になる。

この伝説によつてこの文化は文化として至ったと思う。

流行りものが時を経て廃れていくように、バーチャルYouTuberもまた時代を跨ぎ変わっていったのだった。

私が黎明期に見たバーチャルYouTuberはいつしかそう呼ぶには躊躇してしまふ程似つかわしくなっていた。

だが似つかわしくないそれは間違いなくバーチャルYouTuberだったのだ。

歴史には間違いなくそう刻まれている。

同じ存在、同じ文化、同じ場所、同じ世界を相互共有し、共に歩み、共に支え合い、共に傷ついて、共に居た筈のバーチャルYouTuber。

なのに何故色が違って見えるのか？

あんなに鮮やかに眩しくて、色とりどりで心奪われたのに、今は全てが灰色に観える

灰色（モノクロ）の世界になっていた。

そんなモヤモヤとした日々が過ぎていた時、『プニキ』がこの世を去るとこの灰色（モノクロ）の世界で眩かれた。

その日は2020年12月16日、平日。

この話題が駆け巡り静かに『プニキ』の終わりが近づいてきた時、ある日を境にポツポツと、誰かは懐かしむ様に、誰かは噂を聞きつけ初めて相見え出すバーチャルYouTube達の姿があつた。

そしてとある誰かは「何かヤツとはやらなきやいけないなど思つて。」という一言から始まり、初めて『プニキ』と見覚えのある死闘を繰り広げた。

気づくとこの灰色（モノクロ）の世界には『プニキ』が溢れていた。

あちこちで『プニキ』の『困難』と『理不尽』に打ちのめされ、悲鳴をあげたり苦しみ出す姿を目にし、その姿に対して笑いや声援と応援にまみれる世界がそこにはあつた。

四天王も、その後が続いた者達も、その後の後が続いた者達も、脈々と後を追つて広がった世界が全て『プニキ』で染まっていた。

とても、とても大きな大きなお祭りだった。

バーチャルYouTubeの文化の基礎となつた歴史の一部の終わりをきつかけ

に、その色を取り戻したかの様だった。

……

……………

数々の新しい死闘を終え、2020年12月16日の午後8時、再び伝説が再演される。

「BANS筆頭！〜だ！」

「今日の豪遊雑談はなんでか知らないんだけど……戦う羽目になった宿敵だとか言う奴をブチのめしたのでえ〜始めたいと思いまあ〜すッ！」

……1時間後

「うーん……凸するか？……やっぱり……」

……また1時間後

「やっぱり来ちゃったよ……こくおー……」

……

「あーあ……伝説になっちゃったわ……そりやそうだよなあ」

……

「もうそろそろ終わるのか……」

「じゃあそろそろアレか……言わなきゃいけないな……じゃあメイカ、準備すつから打

ち合わせ通りで頼む……みんなもDiscordでさつき送った通りでやるから始
まったら頼むな」

「OK……じゃあえつと」

「実は観てるみんなに伝えたい事があって……実は今回の『祭り』はここに集まってくれ
たバーチャルYouTuberのみんなで元々やる事を決めてたんだよ」

「俺はこの世界に出会って、惹かれて、この世界で生まれていつか天下取ってやろうとこ
こまで駆け抜けてきたけど、気づいたらいつの間にか生まれた時と世界変わってきて
さ、それが当然なんだけど」

「別に今が嫌とかじゃ全く無くて、すごく楽しいし、思い出も出来たし」

「でも生まれたばかりの頃とは今は違ってきたよな」

「ここまで経つと俺も色々あるし、みんなも色々合っただろうし」

「生きて来れた以上ここまでの道のりを間違ってたなんて絶対思わねえけど」

「やっぱり何か区切り出来れば良いなと思ってたらさ」

「アイツ終わるって聞いた時これだっと思ってさ」

「ここまで大事にするべきか分からなかったんだけど、聞いてみたら実は俺達みんなお
んなじ気持ちを少なからず抱えてたの分かったから、この「祭り」を計画したんだ」

「アイツとのケリも着いたから」

「ここでバーチャルYouTuberともケリをつける事にしたんだ俺達は。」

「……今日を以つて、俺達バーチャルYouTuberは」

「バーチャルYouTuberを卒業して」

「Vtuberと名乗ります」「なります」

「今の俺達と何一つ変わらないけど」

「次に進む為に」

「これまで共に居てくれてありがとう」

「そして、これからもどうぞ宜しくお願いします」

「我々は変わるけど」

「残っていきます」

「存在し続けて、存在したいです」

「生きていきます」

「貴方達と共に」

「これがバーチャルYouTuberの最後だ。」